

日高理恵子
村瀬恭子
吉澤美香

ドロージング から。

10/14 月 ➤ 10/28 月

10:00 ➤ 18:00

ⓧ 10/20 日, 10/22 火, 10/27 日

トークセッション

10/26 土 14:00 ➤ 16:00

出品作家：日高理恵子、村瀬恭子、吉澤美香

ゲスト：成相 肇（東京ステーションギャラリー学芸員・評論家）、中尾拓哉（美術評論家）

※ 事前申し込み制・先着順。

※ 受付はすべてHP内イベントページにて行います。

※ 詳細は随時HPで公開致します。



@多摩美アートテーク

<http://www.tamabi.ac.jp/geigaku/iemuraseminar/index.html>



日高理恵子

1958年東京都生まれ。1985年、武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻修了。1995年から1996年まで、文化庁芸術家在外研修員としてドイツに滞在（クンストアカデミー・ミュンスターに在籍）。

主な個展に、「近作展 22 日高理恵子」（国立国際美術館、大阪、1998年）、「The Space of Trees」（アートカイトミュージアム、ドイツ、2003年）、「日高理恵子 空と樹と」（ヴァンジ彫刻庭園美術館、静岡、2017年）、「見ること—作品集 1979-2017より」（小山登美夫ギャラリー、東京、2018年）など。主なグループ展に、「CHIKAKU: Time and Memory in Japan」（クンストハウス・クラーツ&カメラ・オーストリア、オーストリア、他巡回、2005年）、「Rising Sun, Melting Moon: Contemporary Art in Japan」（イスラエル美術館、イスラエル、2005年）、「Kami, Silence-Action: Japanese Contemporary Art on Paper」（ザクセン州立美術館銅版画館、ドイツ、2009年）、「山荘美学：日高理恵子とさむらびき」（アサヒビル大山崎山荘美術館、京都、2010年）など。



村瀬恭子

1963年岐阜県生まれ。1989年、愛知県立芸術大学大学院修了。1990年から1996年まで国立デュッセルドルフ芸術アカデミーに在籍。1993年には、コンラッド・クラブックよりマイスター・シューラー取得。

主な個展に、「セミとミズク」（ヴァンジ彫刻庭園美術館、静岡、2007年）、「Fluttering far away」（豊田市美術館、愛知、2010年）、「絵と、vol.3 村瀬恭子」（ギャラリーαM、東京、2018年）、「park」（タカ・インシギャラリー、東京、2019年）など。主なグループ展に、「MOT アニュアル2002 フィクション？絵画がひらく世界」（東京都現代美術館、東京、2002年）、「六本木クロッシング：日本美術の新しい展望2004」（森美術館、東京、2004年）、「Red Hot: Asian Art Today from the Chaney Family Collection」（ヒューストン美術館、アメリカ、2007年）、「放課後のらっぱ—樺田伸也とその教え子たち」（愛知県美術館・名古屋市美術館、愛知、2009年）、「絵画の庭—ゼロ年代日本の地平から」（国立国際美術館、大阪、2010年）など。



吉澤美香

1959年東京都生まれ。1984年、多摩美術大学大学院美術研究科修了。

主な個展に、「吉澤美香展」（佐賀町エジビット・スペース、東京、1987年）、「吉澤美香の部屋」（いわき市立美術館、福島、1997年）、「作家の現在 吉澤美香 絵画とドローイングのあいだに」（いわき市立美術館、福島、2005年）、「共感Empathy」（ギャラリー・アートアンリミテッド、東京、2017年）、「吉澤美香展 1990-2006」（豊川市桜ヶ丘ミュージアム、愛知、2018年）など。主なグループ展に、「第18回サンパウロ・ビエンナーレ」（ブラジル、1985年）、「Documenta 8」（ドイツ、1987年）、「Art in Japan Today 日本の現代美術 1985-1995」（東京都現代美術館、東京、1995年）、「起点としての80年代」（金沢21世紀美術館、石川、他巡回、2018年）、「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」（国立国際美術館、大阪、2018年）など。

。とく、一ト一口

作品画像

日高理恵子「空との距離 X（ドローイング）」 2013年 69×69cm 紙に鉛筆 撮影：渡辺郁弘
村瀬恭子「深谷（エメラルド）」 2017年 64.5×50cm 紙に顔料、鉛筆、パステル色鉛筆
吉澤美香「をー67」 2004年 218×157cm 合成紙にグアッシュ、アクリル絵の具

多摩美術大学美術学部芸術学科「家村ゼミ展」は、2017年に始まり、第一回は「高柳恵里 × 高山陽介 × 千葉正也」、第二回は泉太郎の個展を開催いたしました。いずれの展覧会も、展覧会の完成形をあらかじめ定めず、作家・学生・教員、さらにはその周辺をも巻きこみ、考える過程そのものを運動体として提示する行ないを指して展覧会と捉え、展覧会の再考を教育の現場で試みてきました。

三年目となる今年は、「日高理恵子 村瀬恭子 吉澤美香 ードローイングから。」を開催いたします。絵画作品の基となるドローイングには、作家の思考、身体性や感覚が無垢なままに（溢れんばかりに）詰まっています。本展は絵画の一步手前に遡り、ドローイングから、絵画の生成を再考しようとするものです。出発点として、まず「ドローイング研究会」を立ち上げました。メンバーは、作家の日高理恵子、村瀬恭子、吉澤美香、キュレイターの蔵屋美香、家村珠代、そしてゼミ生たち。メンバーの作家が、芸術学科研究室にドローイングを持ち込み、展示し、その一点一点について丁寧に討論を重ねました。展覧会では、さらにその延長として、選定したドローイング作品とペインティング作品とで構成していきます。

三作家それぞれ、ドローイングの捉え方も形態も大きく異なります。空と顔が平行になるくらいに首を曲げながら木を見上げ、180度下を向き直し筆圧の強い線で「空との距離」を平面に刻み出現させようと試みる日高からは、「見切ることができない」「見切れない」という言葉が研究会で頻繁に使用されました。村瀬は、ドローイングとは、目の前の画面をあたかも張り詰めた水面を揺らすようにして、そこに現れてはすぐ消えてしまうような微かなことを、立ち上らせ留める一番の幸福な場である、と語りました。透明感があり、カラフルで浮遊感のある作風が印象的な吉澤からは、意味性やストーリーを限定しない、むしろ解放することから発想がなされ、さらにドローイングとペインティングの区別はないことが明かされました。

一点一点ドローイングを熟読する研究会から始まり、これをどのように展覧会という形に反映できるのか、できないのか。今年も、展覧会オープンまで、試行錯誤は続きます。

主催…多摩美術大学美術学部芸術学科 展覧会設計ゼミ
会場…多摩美術大学 八王子キャンパス
アートテークギャラリー 101、102、103、104、105
〒192-0394 東京都八王子市鐘水2-1723
アクセス…橋本駅より↓北口6番乗り場より神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」約8分
八王子駅より↓南口5番乗り場より京王バス「急行多摩美術大学行」約20分